

1. はじめに
2. 大阪の紙芝居出版
3. 「御利益石」
4. 教画出版の紙芝居
5. 吉村一信氏の生涯
6. 分裂したコレクション
7. おわりに

1・はじめに

平成十年四月およそ五十二点の紙芝居が小田又治郎氏から箕面市立中央図書館に寄贈された。故吉村一信氏のご遺族の意を受けたもので、今年で十年目を迎える箕面紙芝居まつりを中心にした箕面市の紙芝居活動が評価されたと思われる。箕面市立中央図書館にはすでに街頭紙芝居を中心にした上笙一郎コレクション一五八点、向井民生コレクション六十五点、また印刷(教育)紙芝居の長屋重松コレクション六点を持っており保存、整理と活用についてのノウハウにおいても申し分がない。

さて、今回の吉村一信コレクションの存在意義は、戦後すぐの印刷(教育)紙芝居で東京以外の地で発行されたものは、現在北海道の紙芝居しか確認されていないと言われているが、大阪で発行されたものがまとまって保存されていたことに尽きるのだ。このことについてはあらためて論ずる。吉村氏はその活動の中心人物であったことがこのコレクションによって逆照射されている。

なお、コレクション調査に当たっては箕面市立中央図書館の関係者の皆様にたいへんお世話になった。ここに記してお礼申し上げます。

2・大阪の紙芝居出版

吉村一信コレクションには二十九点の印刷紙芝居がある。その他に作品として揃っていない印刷紙芝居や手描きの紙芝居もあり、すべてをあわせると五十二点になる。この五十二点については目録用カードに書誌事項を完全に記した。そのうちの二十九点について以下に作者、画家等を中心にした一覧を収めておく。(五十音順)

- 稲むらの火 脚色・松永健哉、絵画・西正世志、製作・日本教育紙芝居協会 日本教育畫劇(株) '42
おたまじゃくし 作・本田義一、画・岸谷勢蔵 教画出版(株) '55
かめいわ 作・童話教育研究会、画・貴田青紅 教画出版(株) '54
がんのたび 作・吉村一信、画・岸谷勢蔵 教画出版(株) '56
キュリー夫人 作・三和益二郎、画・岸谷勢蔵 教画出版(株) '55
京のかえる大阪のかえる 編・童話教育研究会 教画出版(株) '54
小犬と時計 編・童話教育研究会 教画出版(株) '54
こざるのちえ 編・藤原安治郎、画・安島雨晶 (株)誠文社
小鳥の家 作・吉村一信、画・鹿目尚志 教画出版(株) '55
御利益石—社会衛生 (作・吉村一信、画・Rinji)企画製作・成人教育視覚資料委員会 '49
さざえのじまん 作・童話教育研究会、画・恵須敬子 教画出版(株) '55
三角池 編・演出教画研究会 教画出版(株) '54
じゃのめのかさ 作・遠藤孝子、画・長谷川小信 教画出版(株) '55
ジョン・万次郎 編・教画出版編集部 教画出版(株) '54
しろとくろ 作・童話教育研究会、画・貴谷青紅 教画出版(株) '54
しんたいけんさ 作・三和益二郎、構成・写真・集画堂写真部、演出・指導・大阪市立南百済小学校 教画出版(株) '55
炭焼小五郎 作・吉村一信、画・長谷川小信 教画出版(株) '55
たいをひろった男の子 作・阿部克孝、画・唄野蛾生 教画出版(株) '55
たのしい夏やすみ 編・童話教育研究会 教画出版(株) '54
月夜のバス 編・童話教育研究会 教画出版(株) '54
つみくさ 作・阿部克孝、画・鹿目尚志 教画出版(株) '55
杜子春 原作・芥川竜之介、脚色・福島のり子、画・小谷野半二 教育画劇 '53

どんぐりころころ 編・藤原安治郎、画・吉川長以 株式会社誠文社
流れ星 作・玉木久子、画・鹿目尚志 教画出版(株) '55
フクチャンと怪人物 作・横山隆一 畫劇報國社 '43
みんなであそぼう 作・安井淡、画・小島正 教育画劇 '59
みんななかよしわけわけいいこ 文・脇田悦三、画・坂本健三郎 家庭躰教育研究会
もみじ 作・吉村一信、画・小笠原健 教画出版(株) '55

二十八点のタイトルしかないが、これは「御利益石」が二点あるためである。このうち教画出版株式会社、成人教育視覚資料委員会、家庭躰教育研究会、株式会社誠文社の四つの発行所が大阪を拠点とした出版社である。この四社について細かな情報を記す。

(1) 二十一点

教画出版株式会社、代表者・西村重太郎、大阪市阿倍野区阪南町五丁目二〇番地
集画堂印刷株式会社、代表者・西村重太郎、大阪市阿倍野区阪南町五丁目二〇番地
教画出版編集部、代表者・角田逸二

(2) 二点(同一タイトル)

成人教育視覚資料委員会、代表者・五十嵐 次 大阪市東区北浜四丁目(安田ビル二階二〇五号室)
大和印刷株式会社、大阪市南区鰻谷東之町一九

(3) 一点

家庭躰教育研究会、発行・山地健一、編集・吉田美穂 大阪市東区谷町五ノ五、東京都文京区菊坂町十五
友松印刷株式会社、大阪市東区谷町四ノ二、精版、株式会社日本写真版画社、布施市高井田二ノ一五

(4) 二点

株式会社誠文社、大阪市東区淡路町五丁目五

上地ちづ子の『紙芝居の歴史』に

また、北海道にあっても、紙芝居は出版されていました。これは北海道における戦後の児童文化史を研究する谷暎子によって、はじめて明らかにされたのですが、一九四七(昭和二二)年から「世界名作紙芝居」全一〇巻が刊行開始されています。『ベニスの商人』(武藤鉄寿・脚本)など六巻が確認されていますが、画はすべて梁川剛一によるものです。梁川は、戦中期の少年小説の人気挿絵画家として知られますが、札幌に疎開していたので、紙芝居絵画も手がけたようです。いずれも、新日本文化協会から出版されたものですが、その前身は一九四一(昭和一六)年に設立された北海道教育紙芝居協会。つまり、日本教育紙芝居協会の北海道支部的な役割を担った組織だったのです。戦後にも紙芝居活動を継続したことになるでしょう。この時期、こうした地方での紙芝居出版は、もっと存在していたのではないのでしょうか。けれど、現在は北海道での出版活動だけしか明らかではありません。(注1)

とあり、これが一九九七年二月段階である。そうすると特に(2)の成人教育視覚資料委員会の「御利益石」(写真1)は昭和二十四年、一九四九年の刊行であり、二年遅れるが大阪の地での紙芝居出版活動の戦後での一番古い記録ということになる。しかし(1)の教画出版のものは一九五四(昭和二十九)年から一九五六(昭和三十一年)年に集中しており、こちらが大阪の紙芝居出版の中核であったことは間違いない。そして残念なことに(3)(4)の紙芝居には出版年の記載がなく、同じような年代の出版だろうとは推測できるものの確証は得られていない。

もっとも、大阪国際児童文学館の所蔵目録(注2)には一九五〇(昭和二十五)年「たのしいようちえん」という印刷紙芝居が京都市保育会研究部編集、宏鳳堂刊行で出ているわけで、特に大騒ぎするほどもなくこのような印刷紙芝居は各地で出版されていたような気もする。この目録には教画出版の紙芝居は見ついただけで五点掲載されていた。(注3)

3・「御利益石」

ところでこの「御利益石」という作品。表紙絵に「社会衛生」とあり、また企画製作・成人教育視覚資料委員会とあるように成人向けに迷信的な非衛生行為(石に触って病気を治す)を否定して正しい医学知識を持つようにと勧めたものである。発行年は昭和二十四年六月十五日。二十枚が一セットである。調査中にバラバラになっていたもう一セットも、初めからセットで残っていたもののおかげで復元でき、同じタイトルで二セット残されていたのがわかった。ボール紙製のケースにはどちらも入っていない。ところでこの二セットを見比べると興味深い違いに気が付いた。初めからセットで残っていた方には裏書きの最初に「作・吉村一信」とあり、この方しか見ていなかった時には、これは印刷さ

れたものだとばかり思っていた。ところが後から復元したセットにこの記述が無いのだ。
ところで、この紙芝居には画家の氏名の記述も無い。「Rinji」とあるのは表紙絵に書き込まれたまま印刷されているサインに拠っている。つまりもともとこの紙芝居は作者名も画家名も印刷されていなかったのだ。これが作者であった吉村一信氏は不満であったのに違いない。せめて手元の一セットに作者は自分であると記しておきたかったのだと推察される。

教画出版のものは後でまとめて論じることにして、発行年はわからないが家庭塾教育研究会の「みんななかよしわけわけいいこ」(写真2)と誠文社の「こざるのちえ」「どんぐりころころ」、そして大阪の紙芝居出版ではないが珍品である畫劇報國社「フクチャンと怪人物」に触れておこう。

「みんななかよしわけわけいいこ」は20×26 cmの家庭版紙芝居である。作者は「朝日放送」と肩書きを記述されてる脇田悦三。脇田は『日本口演童話史』(注4)によく登場してきた人物だ。

大阪で活動した脇田悦三は、京都の白河学園という福祉事業を経営するかたわら、童話を語り戦時中から今もなお活動している。(「京都府・滋賀県」高橋良和、P254)

大阪童話教育研究会が発会式を挙げたのは、昭和七年九月一八日、大阪市住吉区帝塚山大阪府立女専講堂において行なわれ、久留島武彦の記念公演があった。(中略)

昭和八年一月に機関誌『子供と語る』を発行することとなり、専門に話す人たちに対して、専門に書く人たちがこれに合流、編集の初期は脇田悦三がこれに当たり、のち阿貴良一、石橋達三、故岡本良雄、故下畑卓、雑賀武夫のスタッフによって、毎号注目されたが、昭和一六年五月号を最終号として『子供と語る』も消滅してしまった。(「大阪府」金津正格・藤野福雄、P274)

実は故吉村一信氏をはじめとして教画出版紙芝居の執筆陣もこの大阪童話教育研究会、関西童話連盟系統の口演童話家たちなのである。

誠文社の二点はこれは異色の企画、「算数紙芝居シリーズ」であり、「どんぐりころころ」(写真3)はその二、「こざるのちえ」はその五となっているから、少なくともこの企画、五タイトルは出版されている。編者の藤原安治郎には「前成蹊学園教諭」の肩書きが記述されていた。どちらも七枚で一セットというのも普通、紙の裁断の関係で印刷紙芝居は遇数枚で構成されていることから見れば異色だ。どちらにも「この単元で学習する内容—10までの数の観念を明確にする」とある。「どんぐりころころ」のほうは

[場面2] 8までの数え方

[場面3] 高さくらべ

[場面4] 8の構成

[場面5] 7の構成

[場面6] 6の構成

[場面7] 2、4、6、8、10の数え方

とある。「こざるのちえ」にも同じような記述がある。

「フクチャンと怪人物」は「大蔵省委嘱作品」とあり、戦時末期の出版。私などの年代が戦後知っているあのフクチャンのあの横山隆一が、つまりのんきで平和そのもののようなマンガが、これほど戦争協力をおこなっていたのかと衝撃を受けるものだ。スパイに気を付けましょうという啓蒙紙芝居で

フクちゃんは、いつもゲタバキである。それは、フクちゃんの行動や理想が、ゲタバキの通用可能な近隣社会にのみ向けられ、限られてきたことを象徴する。良くも悪くも、これまで近隣以外の世界にとんとムトンチャクなのである。戦争があろうがなかろうが、フクちゃんは、いつもの近所の路地や空地で楽しくひっそりと遊びつづける。(注5)

このように論じられたフクチャンまでもついに路地裏から動員され、畫劇による報國をしなければならなかったその悲しい証拠品である。

4・教画出版の紙芝居

吉村一信コレクションの中核をなすのがこの大阪での印刷、出版による印刷紙芝居二十一点である。「作・吉村一信」の記述のあるものが四点。この二十一点には各々シリーズ名が付けられていて、これをながめると全体の構想が浮き上がってくる。

偉人伝記教画シリーズ第一集[二] 五四・七、ジョン・万次郎(偉人伝記シリーズ)

[五] 五五・六、キュリー夫人

自然観察教画シリーズ第一集[二] 五五・三、つみくさ

第二集〔二〕五五・四、おたまじゃくし

〔五〕五六・九、がんのたび

〔七〕五五・十、もみじ

生活指導教画シリーズ第二集〔三〕五五・四、小鳥の家

生活単元教画シリーズ 五四・四、しろとくろ (生活単元シリーズ)

第一集〔四〕五四・七、三角池

〔五〕五四・八、たのしい夏やすみ

童謡教育教画シリーズ第一集〔二〕五五・五、じゃのめのかさ

〔三〕五五・六、流れ星

童話教育教画シリーズ第一集〔三〕五四・六、小犬と時計 (童話シリーズ)

〔六〕五四・九、月夜のバス

第二集〔三〕五五・五、たいをひろった男の子

保健教育教画シリーズ第一集〔一〕五五・三、しんたいけんさ

昔ばなし教画シリーズ第一集〔一〕五五・七 (初五四・四)、さざえのじまん (日本昔ばなしシリーズ)

〔三〕五四・六、かめいわ (昔ばなしシリーズ)

〔四〕五四・八、京のかえる大阪のかえる

〔十〕五五・三、炭焼小五郎

シリーズ名にはぶれがあり、奥付けと表紙に相違があったり、教画という文字が抜けたりするので、同じものだろうと推測してまとめたが、実際に印刷されているシリーズ名は括弧に入れて表示した。「もみじ」以外は発行年順とシリーズ順が一致している。そして例えば昔話教画シリーズなど、あいだが抜けているものには、その未発見の部分も刊行されていたはずだと考えると、十巻あるわけである。となると少なくとも見て四十五タイトルが出版されていたことになる。たった三年間のことなので平均一ヶ月一タイトルを越えた刊行という爆発的なペースである。一九五五年三月には「つみくさ」「しんたいけんさ」「炭焼小五郎」が実際に出ていたわけで一ヶ月に二、三本の刊行は珍しいことではなかったのではない。

次にこれを創った人たちのことである。人名は正しく読めないところもあるので一応五十音順に並べるが誤りについてお教えいただければ幸いである。

阿部克孝 (作)「たいをひろった男の子」(作)「つみくさ」

唄野蛾生 (画)「たいをひろった男の子」

恵須敬子 (画)「さざえのじまん」

演出教画研究会 (編)「三角池」

遠藤孝子 (作)「じゃのめのかさ」

大阪市立南百済小学校 (演出・指導)「しんたいけんさ」

小笠原健 (画)「もみじ」

鹿目尚志 (画)「小鳥の家」(画)「つみくさ」(画)「流れ星」

岸谷勢蔵 (画)「おたまじゃくし」(画)「がんのたび」(画)「キュリー夫人」

貴田青紅 (画)「かめいわ」

貴田青紅 (画)「しろとくろ」

教画出版編集部 (編)「ジョン・万次郎」

集画堂写真部 (構成・写真)「しんたいけんさ」

玉木久子 (作)「流れ星」

童話教育研究会 (作)「かめいわ」(編)「京のかえる大阪のかえる」(編)「小犬と時計」(作)「さざえのじまん」

(作)「しろとくろ」(編)「たのしい夏やすみ」(編)「月夜のバス」

長谷川小信 (画)「じゃのめのかさ」(画)「炭焼小五郎」

本田義一 (画)「おたまじゃくし」

三和益二郎 (作)「キュリー夫人」(作)「しんたいけんさ」

吉村一信 (作)「がんのたび」(作)「小鳥の家」(作)「炭焼小五郎」(作)「もみじ」

このうち阿部克孝、本田義一は大阪童話教育研究会時代からの「同志」であったようだ。大阪童話教育研究会についての研究者畠山兆子がこの会の若手として機関誌『子供と語る』を引用しながら名前をあげている。

この若手の登用は昭和一五年度にも引き継がれた。

学童部より 白神久一、臼井彦四郎、中川源太郎、本田義一、阿部克孝、斎木武、吉岡佐の七氏(中略—堀田)を理事待遇とす。(後略—堀田)

これらの人々の名前が理事として出てくるのは昭和一年、または一五年になってからであるが、同会の活動は当初から彼らによって実質的に支えられていた。(注6)

昭和二年(一九三七)年以後に名前が出てくる童心座は、大阪童話教育研究会学童部に属する放送劇と話術を研究実演するグループで、次の人々が座員であった。

阿部克孝、井上正治、章雄、上田治郎、臼井彦四郎、衛藤賢章、岡部正則、斎木武、白神久一、清徳重雄、副田隆輝、田中賢司、辻楠哉、中川源太郎、中易善三郎、北条忠敬、本田義一、峯松良兵衛、矢部鉄夫、吉岡佐(注7)

そして敗戦後、児童文化研究誌として「のぼら」が発行される。昭和二九(一九五四)年二月一五日の日付の巻頭言を持つ「のぼら」には玉木久子の「さざえのじまん」の画と文の紙芝居案が掲載されている。昭和二五(一九五〇)年二月一五日の「のぼら」は第二巻二号、毎月一回発行とあるから昭和二四(一九四九)年一月が第一巻一号の勘定になる。この二巻二号は編集者吉村一信、発行者阿部克孝、印刷者植野幹衛との記述があった。この会が教画出版紙芝居の出版活動の母体であったのは間違いない。このコレクションの手描き紙芝居「怪物退治」には「のぼら児童文化会」の表示が明記されていた。(写真4)

5・吉村一信氏の生涯

吉村氏は昭和六二(一九八七)年十一月十六日高知市の講演先で倒れ、急性心不全で亡くなった。その追悼誌『吉村一信先生』は編集者小田又治郎、発行者本田義一となっており、二年後の平成元(一九八九)年十一月に発行されている。そこに経歴が記されている。吉村一信は「よしむらかずのぶ」と読む。大正十三(一九二四)年六月二三日生まれ。本籍、現住所とも奈良県北葛城郡王寺町元町。

1. 昭和一九年四月大阪府第一師範学校を卒業し、大阪府柏原堅下国民学校訓導に任じられてから昭和六〇年三月退職にいたるまで、四十年七か月の長きにわたり公立学校教員として児童愛に徹し、その優れた識見と卓越した才能を教育実践の場で遺憾なく発揮した。
2. 昭和三三年四月より十五年間、大阪市教育研究会国語部研究委員。昭和四六年四月から二年間、大阪市教育研究会国語部役員。昭和五八年四月より二年間全国公立学校児童文化研究会副会長として組織の強化に尽した。
3. 昭和三七年十月、「聞く話す指導について」。昭和三八年三月、「話しことばの純化について」。昭和三九年十月、「主旨のはっきりした話し方指導について」。昭和四一年十月、「正確に話すための指導について」。昭和四三年六月NHK放送で「話し上手と聞き上手」。昭和四三年十月、「まとめて話す力をつける指導について」。昭和四五年五月、「国語科入門期の指導について」NHK放送発表。多くの場で研究発表をし、それぞれの教育推進に資するところ大であった。
4. 昭和二四年四月、教材用紙芝居「がんのたび」外七点。昭和三十年十月、「子どもクラブ」。昭和四四年三月、「学校劇脚本集」。昭和四五年五月、「話し方資料について」。等を執筆し、教育的視覚資料紙芝居の作成に尽力し大いに賞讃された。
5. 昭和五十年四月より七年間、大阪市小学校、学校劇と話し方研究会副会長。昭和五七年四月から昭和六十年三月まで会長として全市的組織の活性化に手腕を発揮した。
6. 昭和四八年十一月には勤続二五年表彰を大阪市教育委員会より受けた。
7. 昭和四九年四月より教頭として、荻田小学校に勤務し、よく校長を補佐し、職員児童を掌握し、和の精神のなかに一本の筋を貫き真心をこめて学校運営に尽力した。
8. 昭和五一年十一月、文部省短期海外派遣員として五か国に及ぶ視察をし、全市教育に貢献をした。
9. 昭和五五年四月、弘治小学校長に赴任。学校長として積極的に学校経営にあたり、教育環境の改善と基礎的・基本的学力の向上、生活指導の徹底をはかった。特に、教育環境の改善にあたっては、施設・設備の拡充整備に重点をおき、理科室・音楽室・家庭科室・はもとより運動場の整備、校舎の塗装など児童の学習環境整備に努め見事に完成させた。また、校舎の老朽化にともないPTA・地域をあげての全面改築推進に努力した。ひとりひとりの子どもをみつめ愛し、子どもたちへ毎年誕生日には手づくりのバースディメールを送りとどける配慮をし、全校児童・保護者とはもとより地域住民からも敬愛される人柄であった。
10. 昭和六一年四月、奈良地方裁判所の調停委員。大阪市小学校、劇と話し方研究会相談役。大阪市立子ども

文化センター講師。話し方科学研究所副所長等を兼務した。(注8)

このように十項が挙げられていた。ただこれでは口演童話運動とのつながりが明確ではない。しかし『日本口演童話史』の方に記述がある。

大東亜戦争は集結したが「口演童話」の復活は遅々としてみるべきものがなかった。

何事も民主主義の名のもとに改革されていったためでもある。教育界もまた然り。ことに日教組の存在は教職にある童話人の再起を阻む一因ともなりかねなかった。何事も校長の一存できめられなくなった行き過ぎもあり、小学校における「童話会」の開かれることも希であった。

こうしたころ教職の経歴をもつ奥野しげるが柿谷華王子、中井駿二とともに「関西児童文化協会」を組織し「口演童話」を中心に児童文化の再起をはかろうとしたのが、昭和二三年のことである。塚田喜太郎、藤野福雄もよく協力した。機田純(注9)「児童文化」を発刊したのが同二四年五月であったが惜しくも一〇号をもって廃刊の浮目を見る。

ようやく各所で「子ども会」が開かれ気運が熟し「口演童話」も復活の軌道に乗ることになってきた。ここで「大阪児童文化協会」と改称し組織の強化をはかる。新人間野大雄、吉村一信、植田博一、山野昭典、小谷漣乗、山根匡雄、井上真孝等が中心となり運営に当り、戦後における唯一の童話団体として現在に至っている。(注10)

口演童話の戦争協力の問題がここにあるわけだが、意識としてはむしろ連続して、大阪童話教育研究会の若手の吉村一信氏らが正統派の口演童話主義(注11)を受け継いでいったのだった。

6・分裂したコレクション

私自身も古書店から購入した教画出版の印刷紙芝居を所有している。これが箕面市立中央図書館コレクションとは重なっていない。

ころころ健ちゃん 作・ツカダキタロー、画・鹿目尚志(保健教育教画シリーズ第二集[五])'55

どんぶらこ 文・童話教育研究会、画・貴谷青紅(注12)(日本昔ばなしシリーズ第一集[二])'54

ねむらぬ国 編・童話教育研究会(童話教育教画シリーズ第一集[五])'54

ひょうたんラジオ 編・童話教育研究会(生活単元教画シリーズ第一集[八])'54

こうして見てもシリーズ分けがいいかげんでなく数年間に大量の作品が刊行されたことがわかる。そして教画出版コレクションは箕面だけでなく札幌にも同量程度のものがあるのだ。

先生の残された多くの素晴らしい児童文化資料に接し、残された我々でこの偉業を伝えてゆく義務があると感じ、文献は大阪国際児童文学館、人形劇関係は私、紙芝居は一部愛弟子、その大部を縁あって札幌市立人形劇場「やまびこ座」が保管利用する運びとなった。既に紙芝居は札幌市の紙芝居愛好家達によって、子供達に語り伝えられているという。

この追悼誌編集のさなか、北海道文化放送テレビが、その経過と、この期の活用の為のキャンペーン番組を特集放映される事となり故人の仏前で関係者取題(注13)に応じた。(注14)

と、小田又治郎氏は報じている。札幌へのコレクション移譲は箕面市の紙芝居活動がまだ未熟な時であり、関係者は私もふくめて、その移譲については異議を差し挟む余地が無く、切齒扼腕したものであったが、ツカダキタローの作品「赤いはね」「どうぶつパン」「ころころ健ちゃん」等がそのコレクションの中に含まれている事を知っていた。教画出版のコレクションは戦後すぐの大阪の地において刊行されていたことに意義があるわけで、また戦前から活躍していた関西童話界の人々が関わっていたわけで、その意味で大阪にあってこそ価値がある。特にツカダキタローのものが箕面に無いのは惜しまれるのだ。と言うのも、教画出版紙芝居の作者中ツカダだけが別格であり、大阪童話教育研究会の創設メンバーであった。一九三二年九月十八日、その発会式の時にツカダは、大阪童話教育研究会のモットー「子供と語る」について「こととの違い」と題して「子供に語る」とどう違うかを演説したのだった。(注15) 敗戦時二十歳代の吉村氏たちの中にあつて五十を越えたツカダキタローは(注16) 頼りになる大先輩だったに違いない。

箕面市立図書館が図書館法にある資料の収集・整理・保存と言う役目を忠実に果たしているところからも、札幌のコレクションがうまく活用されていることを、少なくとも、もてあまして廃棄などという事態が起こらないように願っている。そして機会があれば札幌の吉村一信コレクションについても調査したいと考えている。

7・おわりに

今回は教画出版の印刷紙芝居を中心に吉村コレクションを論じたが、手描きのもの、端物などについても興味深いものがある。例えば出版された「がんのたび」の原画と思われる「つきよのがん」というスケッチが十二枚のもの十

六枚のもの二点が残っている。十二枚もののほうが吉村一信氏の手になる最初のアイデアスケッチ。十六枚ものは画家の岸谷勢蔵が、吉村スケッチにもとずいて下絵を描いてみたものようだ。というのは、こちらの方には赤鉛筆の校正が入っていて、がんの群の向きを紙芝居のぬく方向に変えるように指示してあるのだ。この二点に「がんのたび」とを見比べると紙芝居がアイデアからはじまって画面構成を考えながらできていくプロセスがよくわかる。そのほかにも様々な吉村氏の活動をうかがわせる手描き紙芝居や、教え子の作品とも思われる幼い作品、GHQの検閲印の入ったものなど、吉村一信の紙芝居へのかかわりが本格的なもので、熱いものであったことが良くわかる。次回にはそれらも視野に入れてあらためて論じてみたい。

注

- (1)『紙芝居の歴史』(日本児童文化史叢書15) 上地ちづ子、久山社、1977、P93～94
- (2)『所蔵紙芝居目録』1990/編集・発行大阪国際児童文学館、P52
- (3)以下に目録番号順に記す。コレクションと重なるものの書誌事項は略す。
 - 132・一本のわら 編・童話教育研究会(昔話教画シリーズ第一集[六])'54
 - 138・京のかえる大阪のかえる
 - 139・さざえのじまん
 - 141・すずめとこいのぼり 編・童話教育研究会(生活单元シリーズ第一集[二])'54
 - 144・どんぶらこ 画・貴田青紅、作・編・童話教育研究会(日本昔ばなしシリーズ第一集[二])'54
- (4)企画・日本童話協会、編・内山憲尚、文化書房博文社。1972、この本は項目・地域別に分担執筆されている。
- (5)『マンガの主人公』作田啓一/多田道太郎/津金沢聡広著、至誠堂、1968、P132
- (6)『忘れられた大阪の児童文化』畠山兆子、大日本図書、1992、P55、文中引用は『子供と語る』一卷六号 昭和八年六月三日 P6
- (7)同右P143、文中引用は『子供と語る』六巻一―号 昭和一三年一―月一〇日 P16
- (8)追想誌『吉村一信先生』P28～29
- (9)とんでもない誤植のままだが「機関紙」が正しいのだろう。
- (10)『日本口演童話史』P279、執筆者は金津正格・藤野福雄
- (11)口演童話運動における自己意識。これについての文献を使つての実証をそのうち試みたい。
- (12)画家名が表紙では貴谷青紅、裏書では貴田青紅となっている。
- (13)誤植のまま。「取材」であろう。
- (14)追想誌『吉村一信先生』P20
- (15)『図書館・ものがたり・都市』拙著、青弓社、1987、P51から53参照
- (16)「塚田喜太郎 一八九四(明27)年?月～没年不明。」『日本児童文学大事典』大日本図書、一九九三